

奏であう人

vol.57



いわい さとし
岩井 哲さん(上山市)

昭和24年生まれ、上山市出身、上山市在住。昭和55年より、編集・出版工房「書肆犀(しよしさい)」を主宰。詩集、画集から研究書まで、100冊を超える在郷の表現者たちの本を幅広く手がける。また、地元上山のローカルマガジン『月刊かみのやま』は創刊から18年、234号を数える。平成27年より東北芸術工科大学[社会学]非常勤講師、令和元年より民間人としては珍しく上山市立図書館館長を務める。



書肆犀から世に出た書籍たちの一部(上段左から)『ありのまま記』『詩というテキスト』『一本の口紅』『母のない子は日に一度死ぬ』『大原堂戯曲集1』『パリの街角から』『養正館のひぐらし』『くうたら草』『田園の大逆襲』『若者たちはヤマガタで何を企てているか?』

本で地域や子どもたちを生き生きと

図書館長としてさまざまな読書体験の機会づくりを試みる岩井さん、海外の絵本・児童書を自ら選び、翻訳を行う横山さんのお二人に、子どもと読書のかかわり方についてお話をお聞きしました。



よこやま かずこ
横山和江さん(山形市)

昭和43年生まれ、埼玉県出身、山形市在住。アメリカで開発されたソフトウェアの英語表記やマニュアルの翻訳を手がける。2006年、絵本・児童文学の翻訳家として活動を始める。原作の選定、出版企画から手がけ、デザインや紙質の検討に関わることも多い。昨年末には、クラウドファンディングで資金集めから関わった『ジュリアンはマーメイド』(ジェシカ・ラブ作/サウザンブックス)を出版。やまねこ翻訳クラブ会員。



『サンタの最後のおくりもの』(徳間書店)以来15年で手がけた絵本・児童書は38冊におよぶ。主な訳書に『サディがいるよ』(福音館書店)、『ほしのこども』(岩波書店)、『キャラメル色のわたし』『山はしっている』(ともに鈴木出版)、『ベネントの魔物たち』シリーズ(偕成社)など多数。

本に囲まれて育ち 今の仕事につながる

「地元短歌会の会誌を制作・配布するような文学好きの父、本棚いっぱいの本、そんな家庭環境の影響かもしれません。これまでの自分の回転軸はずっと本でした」。

岩井さんは編集・出版に深くかわつてきた理由をそう振り返ります。

「図書館長にとの話をいただいたのも、長く地元情報誌の編集や新聞紙上への寄稿を続けてきたからだと思います」。

一方の横山さんも、姉が大の本好きで、海外の翻訳作品に触れる機会が多かったと話します。

「学生の頃に、ピーターラビットの原書を訳してみても、翻訳の難しさと面白さを知り、いつか翻訳の仕事をしたかと思いはじめました」。

パソコン通信のニフティサーブで出会った同志の仲間たちとの交流を通して、勉強、情報収集、売り込みなど、翻訳業に取り組み始めたのは、結婚を機に山形へ引っ越し、子どもが生まれてからです」。

能動的な読書体験 海外作品ならではの多様性

図書館の活動やイベントに多い読み聞かせは、一歩間違えたと受け身になりがちだと岩井さん。

「そこで、図書館ボランティアの発案で子どもが自分で本を選ぶ〈これ読んでコーナー〉を設けました」。

横山さんが、自身のお子さんに読み聞かせした体験からこう応えます。

「自分から物語に好奇心を持つ子と、読んでもらう行為自体に安心、満足を得る子がいます。ただ、親が本を読まない、子どもも読まないのは確かですね」。

横山さんの翻訳作品は、大人が読んでも考えさせられるような物語が多くあります。

「肌の色の違い、性差、障がいの有無など、登場人物もテーマもさまざまですが、それを多様性としてありのまま見せる作品が海外には多いように思います」。

無理にハッピーエンドで終わらせず、読者に解釈や想像の余地をあえて残す〈オープンエンド〉など懐の

深さも特徴だとか。

岩井さんがこれにうなずきます。

「日本の児童書、とりわけ昔話の世界などは教訓的な方向に向かう印象があります。対して横山さんが手がけた作品は、物語そのものを読ませるように思います」。

自分で読みたい本を 選べる環境づくりを

岩井さんが言葉を続けます。

「保護者に人気なのは、同じ絵本の〈日本語・英語読み聞かせ〉ですが、英語教育の側面だけが重視されていないか気になる時があります」。

「知育絵本や学習絵本が好まれるのも同じ傾向ですね」と横山さん。

「ですから、岩井さんが取り組まれているような、自分で読みたい本を選ばせる環境づくりが大切です。親や司書の方が、子どもに本の情報を伝えるブックトークの機会をもつと増やしてほしいですね」。

横山さんは今後、翻訳のほかにも、エッセイなどを通して、多くの本を紹介する活動にも取り組んでいきたいと話してくれました。

